

平成十九年度 札幌光星中学校入学試験問題 国語

注意事項

- 一、 試験時間は、四十五分間です。
- 二、 開始の合図により、始めてください。
- 三、 問題は、第一問から第三問まであり、解答用紙と合わせて四枚あります。
- 四、 答えは、すべて解答用紙に記入してください。
- 五、 印刷が不明な場合のほかは、問題についての質問は受けつけません。
- 六、 試験終了後は、解答用紙回収が終わるまで、席を立たず、静かにしててください。

第一問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二〇世紀は「科学の世紀」と呼ばれるくらい、科学研究が大きく進歩した時代ですが、同時に、科学で発見された法則や原理の技術化を通じて機械や道具が作られ、私たちの生活に入り込み、社会を大きく変えてきた時代でもありました。^{*}1 典型的なもの、二〇世紀前半の電気・自動車、後半の原子力利用・石油化学工業・エレクトロニクスでしょう（飛行機やレーザーなどもありですが、社会に大きな影響を与えたのは、先のようなものだと思います）。そして今後は、遺伝子操作を通じた生物（人間も含む？）の^{*}2 改変ではないでしょうか。

このように、科学が技術を通じて社会と強く結びつくようになったのが、二〇世紀の大きな特徴であり、今後さらに強まってゆくと思われます。¹ そのような時代に生きる私たちは、科学・技術・社会の間の関係をしっかりと把握しておく必要があるでしょう。

まず、科学の技術化までの時間が非常に短くなり、社会にどのような効果を及ぼすかを考えるひまが^アないまま、どんどん科学の成果が生活に入り込んできているという問題があります。その典型は原子力で、原子核の中の力や構造が明らかにされてから一〇年も経た^イないうちに、原子爆弾が開発されました。マンハッタン計画という、政府や軍が組織したのはじめてのビッグ・プロジェクトによって進められたためでしたが、一般の人々が原理や威力を知らない間に、核の時代がもたらされたのです。

（a）水爆の開発・原子力発電と、原子力エネルギーの利用は加速され、私たちがそれを選んだわけでもないのに、核と向き合ってくるさざるを得^エないわけです。遺伝子操作についても、同じ道をたどりそうな気配です。

いったん技術化されると、その目的はもはや問われることなく、よりいっそうの精密化・効率化が進められ、後戻りできなくなってしまうのです。この問題で、特に原子力や遺伝子操作を取り上げるのは、それらが長い時間、後世に影響を与え続けるからです。原子力発電の核廃棄物は、一万年にもわたって監視し続けねばなりません。遺伝子操作で新しいタイプの生物が作られた場合、未来の生物世界を変えてしまうかもしれません。私たちは豊かな消費生活を送っても、² シンソンたちはその「つけ」を払わされることになるでしょう。科学の技術化にあたっては、このような長い時間にわたっての予測をして、それを採用するかどうかを決めねばならないはずで、（b）それを考える間もなく、どんどん技術化が進められているのです。³ 私たちは、いちど立ち止まって、現在の科学と技術の関係を考え直さねばならないのではないのでしょうか。

もう一つの問題は、科学の原理や法則は一つであっても、技術化の方法は複数あるということです。原子力発電でも、ジェット機でも、パソコンでも、ワープロでも、それぞれの機種に応じて複数の方式がとられています。最後には、どれか一つだけが残るのか、平行で競争するのはわかりませんが、さて、その選択はどのような理由で行われるのでしょうか。ある技術が最後まで生き残った理由は、エネルギーや資源の節約型だから、最も使いやすいから、安全性にすぐれているから、市場の競争で勝ったから、製造会社が強かったから、政府が援助したからなど、いろいろあるでしょう。つまり、技術は、⁴ その科学的な合理性だけでなく、社会との関係の中で選ばれますから、（X）の変化に応じて（Y）の内容も変化するはずで、しかし、それが長い目で見て正しいのかどうか考える必要があるでしょう。

（c）かつては「丈夫で長持ち」型の製品が作られました。時計でもラジオでも、何十年も使ったものです。資源節約という目標が優先されたのです。現在は、「使い捨て」型の製品が主流になっています。数年で壊れると⁵ シェウリせずに買い替えるという、より大量に消費することが優先されているからです。私たちは、経済の論理で技術化の方式が決まっている場合があることをしっかりと押さえておく必要があると思います。環境破壊に、私たちに責任があるからです。

その典型は、現在の日本がクルマ優先社会となっていることです。狭い土地に高速道路をはりめぐらせ、六千万台ものクルマがあふれ、ゆつくり道を歩くこともできません。子どもや老人・体の不自由な人にとっては、⁶ キケンな都市の構造になってしまいました。国の政策として、電車やバスなどの公共交通機関より、トラック輸送とマイカーが優先されたためなのです。そして自動車会社は、意味の⁷ ないモデルチェンジで、どんどんクルマを買い替えて資源の無駄使いをしています。このよう⁸ な「ジョウタイ」を、私たちは当たり前として、異常さに気づかなくなっています。技術がいかに使われるべきかを、望ましい社会のあり方と関連づけて考えねばならないと思います。

（池内了『科学の考え方・学び方』）

※出題にあたり、本文を一部改めました。

*1 典型……代表的な例としてあげられるもの。

*2 改変……物事を改めて、もともとちがった形にすること。

問一 —— 線2「シソン」・5「シュウリ」・6「キケン」・8「ジョウタイ」を漢字で書きなさい。

問二 (a) (b) (c) に入れるのにもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。
ア たとえば イ ところが ウ または エ さらに

問三 —— 線7の「ない」と同じ働きの「ない」を~~~~線ア〜エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

問四 —— 線1「そのような時代」とはどのような時代ですか。解答らんに合う形で二十五字以内でぬき出しなさい。

問五 —— 線3「私たちは、いちど立ち止まって、現在の科学と技術の関係を考え直さねばならないのではないのでしょうか」とありますが、「私たち」はどのように考えなければならぬと筆者は述べていますか。次の二つの語句を必ず用いて、八十字以上九十字以内で答えなさい。ただし、書き出しを「科学は」で始めること。
【語句】 後戻り 予測

問六 —— 線4「その科学的な合理性」とはどういうことですか。それを説明した次の文の() にあてはまるものを、本文中から五字でぬき出して答えなさい。
技術が科学の() に合っているということ。

問七 (X) (Y) に入る語句としてもっともふさわしいものを、次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。
ア 科学 イ 技術 ウ 資源 エ 社会

問八 本文の内容と合っているものを次の中から二つ選んで、記号で答えなさい。
ア 科学技術は現在の私たちの社会を大きく変えてしまったが、もう一度以前の生活にもどすことが必要だ。
イ 遺伝子操作の技術は、その原理や影響がわからない間に、私たちの生活に入り込む可能性がある。
ウ 私たちが豊かな消費生活を送るためには、よりいっそう技術の精密化・効率化を加速させるべきだ。
エ 私たちは平気で資源の無駄使いをしているが、そのことの異常さに気づかなければならない。
オ 現在は環境破壊がすすんでしまっているため、環境への影響を考えた新しい技術の開発が必要だ。

第二問 漢字についての次の説明を読んで、あとの問いに答えなさい。

漢字は、今から三千年以上も前に中国でできたものですが、その成り立ちには大きく分けて次のア〜エの四通りがあります。

ア 目に見える形がある物を、具体的にえがいたもの。

(例)  ↓  ↓ 「山」

イ 目に見えない事からを、印や記号を使って表したもの。

(例) ● (基準となる線の上に印をつけた) ↓ ⊥ ↓ 「上」
ウ 漢字の意味を組み合わせて新しい文字にしたもの。

(例) 田+力 ↓ 「男」……「田」に出て「力」を出してはたらくのは「男」。

エ 音を表す部分と、意味を表す部分を組み合わせたもの。

(例) 「河」……「可(カ)」が音を表し、「シ」が意味(みず)を表す。

問 次の(1)〜(5)の漢字の成り立ちはア〜エのどれにあてはまりますか。それぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

- (1) 銅
- (2) 森
- (3) 本
- (4) 信
- (5) 馬

第三問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ヒロシは、一九六九年春、東京から西日本のいなか町へ引越し、ともだちのいない小学校に入学した。その年の夏休み、ヒロシはカラーテレビがあるという上田くんの家へ、アメリカの宇宙船アポロ十一号の月からの生中継を見に行った。

上田くんはウツつきで、ほんとうにいやな奴だ。好きなわけない、こんな奴のこと。でも、嫌いなのかどうか、いまはちょっとよくわからない。

*1 空母『赤城』のプラモデルを二人でつくった。といっても、ぼくは部品を粹からはずすだけで、接着剤でつけていくのは上田くん。たまに上田くんが「ヒロシ、ここやってみるか?」と言ってくれるけど、「失敗するけん、ええよ」と断った。「ぶちかんだんなどころじゃが、ヒロシでもできる思うがのう」と、(A)。そんな上田くんを見ると、アタマに来るような、意外とうれしいような、ヘンな気分になる。

1 ぼくは上田くんのもだちなんだろうな、たぶん。

上田くんはぼくのもだちなんだろうか。自転車漕ぎながらずっと考えていたけど、わからないままだった。いまもわからない。これからも、わかるかどうかわからない、なんて頭がこんがらかりそうだけど。

でも、なんとなく、二学期からは上田くんとあまり遊ばなくなりそうなのがする。ケンカとか絶交とか、そんなのじゃなくて、ちょっとずつちよつとずつ離れていくんじゃないかと思う。

台所のほうから、かき氷器で氷を削るシャリシャリという音が聞こえてきた。

「ちよつと、わし、手伝うてくるけん」

上田くんは、やりかけのプラモをほったらかしにして部屋を出ていった。いつもはお手伝いなんかしない奴なのにヘンだなと思っていたら、おかあさんと上田くんの声が聞こえた。話まではわからないけど、おかあさんはなにか怒っているみたいだ。

「ええんじや」(B)。「ヒロシはこれが好きじゃ言うてるんじやけえ」

なんだろうなと思いつつ、待っているのが退屈なので『赤城』の甲板に小さな *2 ゼロ戦を載せた。ここに置こうと決めた位置より、だいぶずれた。つけすぎだった接着剤が甲板にはみ出してしまい、指で拭き取るうとしたら、かえって広がってしまった。上田くんにも早くプラモの好きなどもだちができればいいのに。ぼくは野球やサッカーの好きなどもだちを探したい。樋口くんや山根くんは、意地悪なところもあるけど、けっこういい奴なんじゃないかという気がする。吉野くんはどうだろう。あいつ、野球が大好きですごくうまいけど、すぐにいばるから、いっしょに遊ぶのはちょっといやだな。

上田くんが、かき氷のお皿が二つ載ったお盆を持って戻ってきた。

かき氷は、一つが黄色で、もう一つは紫色。黄色はレモンだ。そして紫色は――。

「ヒロシがグレープがええ言うけえ、たいへんじやったんど。おとつ、大阪のおじさんに電話して送ってもらおうたんじや」

「ほんま?」

「おう、おじさん、ぶちでけえ会社の社長じやけえ、わしが頼んだらなんでも送ってくれるんじや。自分がたの *3 セスナも持つてるんで」

「……ふうん」

「わし、今度セスナに乗せてもらうんじや。ヒロシもいっしょに乗せちやろうか?」

ぼくはなにも答えず、グレープのシロップのかかったかき氷をスプーンでくずした。ほんとうだ。ぶどうの香りがする。生まれて初めての、グレープのかき氷だ。

一口、食べた。甘い。でも、シロップの甘さとは違う。もつと濃くて、すっぱさもあるけど、ぶどうのすっぱさというより、ヨーグルトみたいな、ヤクルトみたいな、喉に埃っぽいものが貼りつくような……。

思わず「うわっ」と声が出そうになった。わかった、カルピスだ、グレープカルピスの味だ、これ。声をこらえ、吹き出してしまふのをがまんしているうちに、息が苦しくなってきた。顔を上げられない。口の中に残った氷をこくと呑み込んだら、グレープカルピスの味が濃すぎて、 *2 むせかえりそうになった。

「どんな? うまかろうか?」

上田くんがきいた。自慢する顔じゃなくて、ぼくが気に入るかどうかが不安そうに。言ってみようか。笑って、からかって、バカにしてやろうか。

3 でも、ぼくは黙ってもう一口食べた。氷の冷たさと、グレープカルピスの甘さとすっぱさと、それから、なんだろう、どんな味かわからないけど、喉と胸がキュッとすばまってしまふ。

「のう、どんな?」(C)。

「すごく、おいしい」

言ったあと、違うなと気づいて、「ぶち、うめえ」と言い直した。

上田くんは、うれしそうに笑った。「じゃろ？ じゃろ？ ほんま、うめえんよ、これ」と（ D ）。

あとは二人ともなにも話さずにかき氷を食べていって、お皿がほとんど空になった頃、おかあさんが廊下を走って部屋にきた。アポロの宇宙飛行士が、いまから月を歩く――。

「予定より五時間も早うなったんよ、いまテレビでやりよるけん、ヒロシくんといっしょにこっちにおいで」

おかあさんは早口に言っつて、居間に駆け戻った。

ぼくと上田くんは顔を見合わせた。いよいよだ、ついに待ちに待った、アームストロング船長が着陸船イーグル号の外に出る瞬間だ。

「よっしゃ、ヒロシ、早う行こうで」

立ち上がりかけた上田くんは、腰がまだ伸びきらないところで、ビクッと体を止めた。

座ったままのぼくを振り返り、照れくさそうに首をひねりながら、目が合うと、そっぽを向いて言った。

「テレビ……また故障しとるかもしれんのじゃけど……」

「ええよ」上田くん、だもんな。「先行つとつて。わしも、すぐ行くけん」

お皿に残ったかき氷は、もう氷が溶けて、グレープカルピスそのものになっていた。お皿から、じかに飲んだ。冷たくて、甘くて、すっぱくて、喉と胸がキュッとすぼまる。

5 ともだち、かあ……。

楽しいのか楽しくないのかよくわからないまま、でも笑って、ぼくは左足一本でゆっくりと立ち上がった。

（重松清『半パン・デイズ』）

※出題にあたり、本文を一部改めました。

*1 空母『赤城』……第二次世界大戦時の日本の代表的な航空母艦。

*2 ゼロ戦……戦闘機の一つ。

*3 セスナ……小型飛行機の一つ。

問一 —— 線2「むせかえりそうになった」・4「そっぽを向いて」の意味としてもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

2 「むせかえりそうになった」

4 「そっぽを向いて」

ア 声を出してしまいそうになった

ア よそのほうを見て

イ 笑ってしまいそうになった

イ あごをつきだして

ウ 息がつまりそうになった

ウ うつぶいて

エ 泣き出しそうになった

エ 首をすくめて

問二 (A) (D) に入れるのにもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 何度も大きくうなずいた

イ 上田くんが顔を下から覗き込んできた

ウ 上田くんの声がある

エ つまらなそうな声で言うのに顔は笑っている

問三 —— 線1「ぼくは上田くんのともだちならうな、たぶん」から読み取れる「ぼく」の気持ちとしてもっともふさわしいものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 上田くんが自分のことをともだちだと思っつてしまったので、腹を立てている。

イ 上田くんが自分をともだちだと思っつて、複雑な気分になっている。

ウ 上田くんが自分のことをともだちだと思っつてくれているかどうか、少し不安になっている。

エ 上田くんは自分にとってのともだちなのだと、自分に言い聞かせようとしている。

問四 —— 線3「でも、ぼくは黙ってもう一口食べた」のはなぜですか。その理由としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 上田さんのウソにはこれ以上たえられないが、からかって仕返しされるのがこわかったから。

イ 上田さんはウソがばれているとわかっているはずなので、今さら言うことでもないと思ったから。

ウ 上田くんはウソがばれていないと思っっているので、自分がおこっていることを伝えたかったから。

エ 上田さんのウソは「ぼく」を思っっていることでもあり、その気持ちをだいなしにしたくなかったから。

問五 —— 線5「ともだち、かあ……」にこめられた「ぼく」の気持ちとして、もっともふさわしいものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 上田くんこそ自分の本当のともだちなのだと思っ、これから積極的につきあっっていこうと強く思っっている。

イ 上田くんともだちでいることはこれ以上できないと思っ、それをはっきりと伝えるべきかどうか迷っっている。

ウ 上田くんのことを決っして好きだとは言っいきれないが、それでも自分のともだちなのかもしれないと思っ始っめている。

エ 上田くんとはやっぱりともだちになれそうにないとおきらめ、なんとかこの場だけはごまかそうと思っっている。

問六 本文中にえがかれている「上田くん」はどのような人だと思っられますか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 他人の気持ちをひこうとするあまり、いきすぎたこともするが、にくめない人。

イ 細かいことによく気がつき、いつもともだちのことを気にかけるやさしい人。

ウ 何をするにも、自分の決めたことは最後までつらぬき通そうとする意志の強い人。

エ 他人の気持ちをまったく考えようとしない、わがままで自分勝手な人。

問七 この場面についてaくん・bくん・cくんの三人の小学生が話し合っっています。次の()に入る言葉を五字以上十字以内で考えて答えなさい。

aくん「今から四十年くらい前は、カラーテレビがあまりなかったんだね。」

bくん「そうだね。ぼくたちはカラーテレビしか知らないけどさ。」

cくん「そんなころに、上田くんの人にカラーテレビがあっったなんてすごいね。」

aくん「だけど、それは() だっったかもしれないよ。」

bくん「そうか、だから故障しているかもしれないって言っったんだ。」